山形村遺跡発掘調査報告書　第16集

KIYOMIZUDERA

清水寺遺跡 Ⅱ

―文化交流施設（仮称）建設工事に伴う記録保存―

2009.3

長野県山形村教育委員会

例　言

1　本書は、平成20年７月14日～平成20年８月12日に実施された長野県東筑摩郡山形村清水高原に存在する清水寺遺跡の緊急発掘調査報告書である。

2　本調査は、山形村による文化交流施設（仮称）建設工事に伴う緊急発掘調査であり、山形村教育委員会が発掘調査を実施、本書の作成を行ったものである。

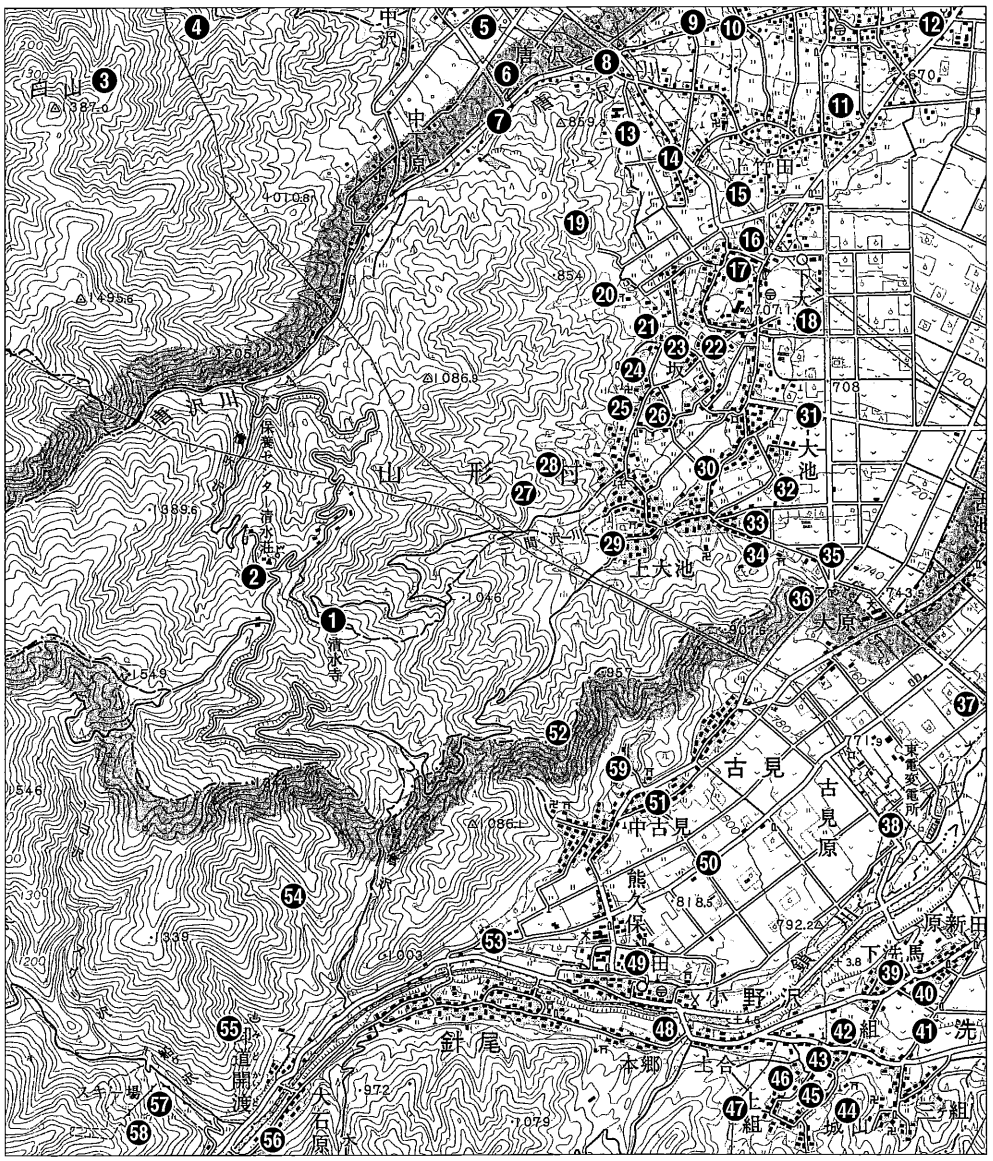
3　本書の編集・執筆は、和田和哉が行った。

4　発掘調査及び整理作業に際し、以下の諸氏・諸機関より御指導と御協力を賜った。

小林　康男　　直井　雅尚　　島田　哲男　　竹内　靖長　　長岡　　寿　　神澤昌二郎

山形村清水寺保存会　　㈳松本地域シルバー人材センター　　㈱ヤマジン

5　本調査で得られた出土遺物及び調査の記録類（図面・写真等）は、山形村教育委員会が保管し、出土遺物は山形村ふるさと伝承館（〒390-1301　長野県東筑摩郡山形村3866　TEL0263-98-3938）に、調査の記録類は山形村農業者トレーニングセンター（〒390-1301　長野県東筑摩郡山形村2040-1　TEL0263-98-3155）に収蔵されている。



1：清水寺
2：官行造林
3：元寺場
4：若澤寺跡
5：中下原
6：唐沢(波田町)
7：美野里ヶ丘
8：唐沢(山形村)
9：北唐沢
10：神明
11：本郷(山形村)
12：北竹原
13：穴観音
14：四ツ谷
15：殿村
16：ヨシバタ
17：中町立道西
18：中原
19：秋葉城址
20：名簟
21：宮村
22：中島
23：石原田
24：堂村
25：寺林
26：清水
27：小坂城址
28：池の入城址
29：豆沢
30：窪
31：野際
32：淀の内
33：下耕地
34：洞
35：横出ヶ崎
36：麦ヶ窪
37：城西
38：東電南
39：三ヶ組北西
40：社宮司
41：三ヶ組
42：山鳥場
43：中村
44：武居城址
45：大日
46：氏神
47：向原
48：本郷(朝日村)
49：熊久保
50：芦ノ久保２
51：芦ノ久保１
52：旭城址
53：犬ヶ原
54：曽倉沢
55：御道開渡
56：一の沢
57：穴沢原
58：駒込
59：古見の館

第１図　清水寺遺跡の位置と周辺の遺跡

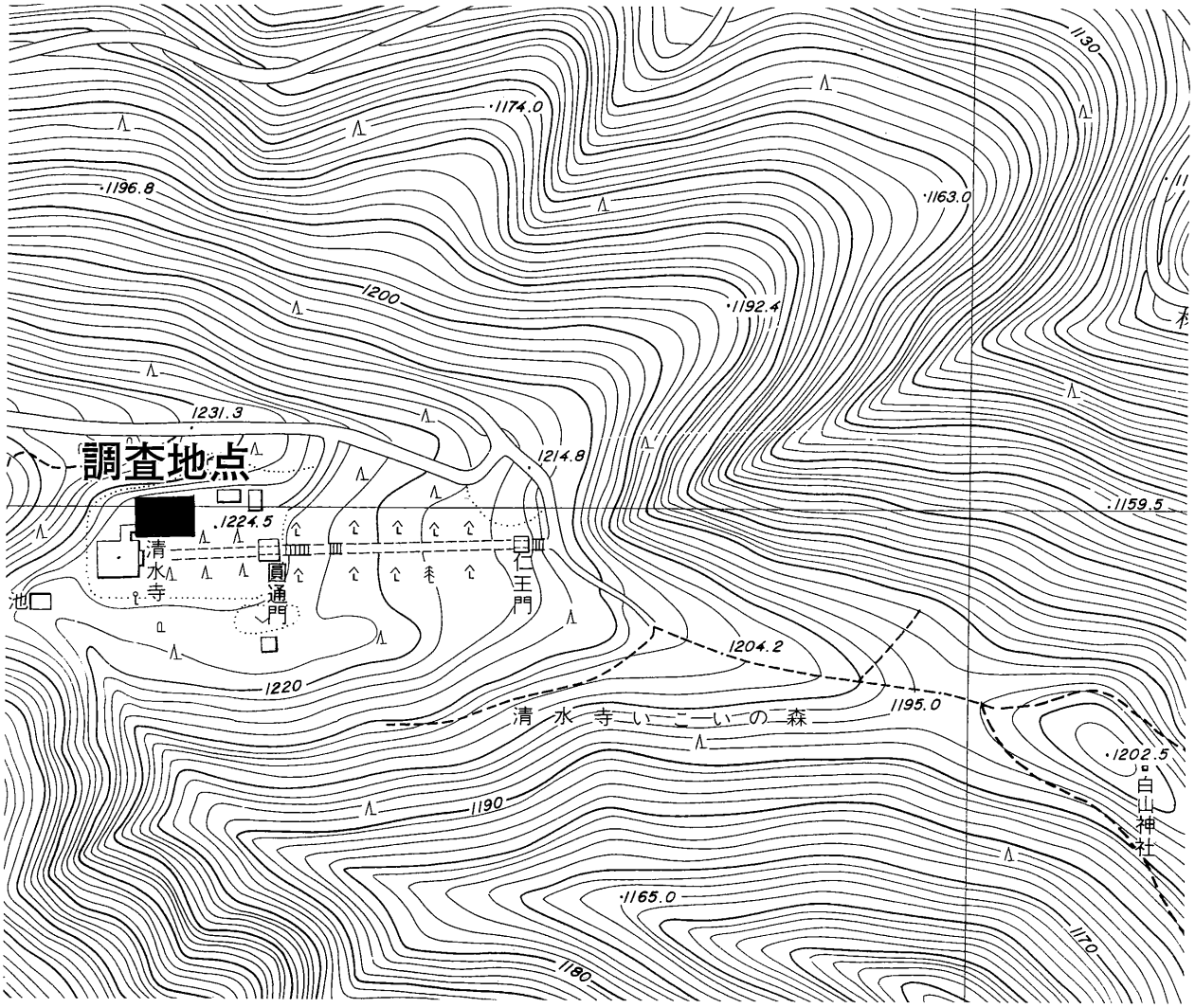
Ⅰ　調査の経緯

1．調査に至る経過

清水寺遺跡は山形村の西側に広がる山間部、清水高原に所在する。人里から遠く離れた山間部ながら、縄文土器片が拾われたことから、周知の埋蔵文化財包蔵地として把握されていた。またこの地に存在する清水寺は、伝承によると開基は奈良時代とされ、坂上田村麻呂伝承をもつ古刹である。これはあくまでも伝承ではあるが、古くから麓の人々と深く関わってきた寺院である。

この清水寺は檀家を持たなかったため、幾度と無く荒廃にさらされたことが古文書類の記録から窺える。安土桃山時代以降は、麓の小坂区にある宝積寺との関係が古文書から確認でき、戦後まではこの宝積寺が維持管理を担ってきた。しかし次第にそれも困難な状況となってきたため、昭和41年、所有していた土地等は村へ寄付され、建物の維持管理は新たに組織された「山形村清水寺保存会」が引き継ぐことになった。以後大切な文化遺産を末永く後世へ伝えていく様、努力が重ねられてきた所と聞く。

この境内の庫裏は、ここ10数年老朽化が一段と進行し至る所で傷みが目立ち始め、地震等による倒壊の危険が懸念される状況となっていた。年間１万人とも言われる程多くの観光客が訪れる場所でもあり、人的被害を心配しその扱いは様々な面から慎重に検討された。最終的に保存会では、建物の撤去止むなしという結論に至り、庫裏は姿を消す事となった。一方山形村では平成16年３月議会において、16年度から５年計画の辺地総合整備計画が議決されたが、この中に庫裏跡地に文化交流施設を建設する計画が盛り込まれた。平成



第２図　調査位置図（S＝1/2,500）

20年に庫裏が撤去される予定となったため、教育委員会では埋蔵文化財の保護を講じるべく調整を行った。地下遺構が破壊されない工法を検討したが難しく、破壊が避けられない約200㎡について、工事着手前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。こうして平成20年７月14日より現地での発掘調査を開始した。

２．調査体制

調査責任者　山形村教育長　本庄利昭

調査担当者　山形村教育委員会社会教育係　主査　和田和哉

協　力　者　大金葦夫、中川長一、村井敏子、山中久代、渡辺喜美治（以上社団法人松本地域シルバー人材センターより派遣）、青木智恵子、直井由加理

事　務　局　山形村教育委員会社会教育係　教育次長補佐兼社会教育係長　小口賢一

Ⅱ　遺跡の位置と環境

１．遺跡の位置と環境

東筑摩郡の最高峰である鉢盛山（標高2446m）は、飛騨山脈からは東に離れた前山的な存在で、四方に尾根を張り出している。山形村のある北方には、界沢山（1994m）、ハト峰（1970m）を経て山形村の最高標高地点である唐沢山（1745m）へと延び、そこで２つに分かれ、一方は波田町の荒倉山（1495m）から白山（1387m）へ、もう一方は山形村の鳴神、御岳山（859m）へと達する。清水寺遺跡（第１図・１）はこの尾根から更に細かく東方へ延びた尾根上に位置し、比較的傾斜が緩やかな場所にある。標高は1250m前後で、この場所から東側の視界は非常に広く、松本平が一望に見渡せる。

この遺跡では縄文早期や前期の土器片が拾われている。山間部の狭い尾根上であり、麓の平地部で発見される様な集落址とは性格を異にしていると思われるが、土器が少量出土しているのみで詳細は分からない。朝日村曽倉沢遺跡（54）や波田町若澤寺跡（４）も同様に山間部にあり、縄文前期の土器片が少量出土している。平地部の遺跡では、草創期の有舌尖頭器が拾われた朝日村氏神遺跡（46）、芦ノ久保遺跡（51）が最も古く遡る。続く早期では、押型文土器が出土した名篭遺跡（20）、土坑から２個体分の土器（早期末）が出土した熊久保遺跡（49）等が知られる。前期では山形村唐沢遺跡（８）、名篭遺跡（20）、中島遺跡（22）等事例が増える。とは言え爆発的に増えるのはやはり中期であり、第１図に示した遺跡の多くはこの期である。朝日村熊久保遺跡（49）や山形村洞遺跡（34）、淀の内遺跡（32）、殿村遺跡（15）等は、発掘調査により拠点的な集落址であることが判明している。しかし後晩期になると遺跡数は減少し、名篭遺跡（20）や山鳥場遺跡（42）等を数えるに過ぎず、細々と言った状況になる。続く弥生時代、古墳時代、奈良時代はほとんど無く、再びこの周辺に人々の営みを明確に認めるのは平安時代となる。

平安時代でもこの地に集落ができるのは、奈良井川や鎖川流域よりも遅れる。山形村では殿村遺跡（15）、洞遺跡（34）、下耕地遺跡（33）等で住居址が発見されているが、いずれも10世紀以降のものである。朝日村でも同様で、熊久保遺跡（49）、氏神遺跡（46）等で遺物が出土している。続く中世は、山形村中町立道西遺跡（17）で室町～戦国期の遺構と遺物、名篭遺跡（20）で鎌倉期の集落址と室町～戦国期の墓地が調査されている。朝日村では表採遺物のみであるが、芦ノ久保遺跡（51）から鎌倉期に湯立て神事に使われたとされる鉄製内耳鍋２点が発見されており、非常に貴重な資料である。また御馬越地区にある宮前遺跡からは、室町期とされる「双雀蓬莱鏡」と呼ばれる銅鏡、西洗馬郷尻からは備蓄銭と考えられる銅銭870枚が見つかっている。これらは藤原実資の日記『小右記』に記された洗馬の牧や、『吾妻鏡』等に記された洗馬の庄といっ

た荘園に関わる集落の存在が想定される。そして室町時代から戦国時代までこの地を支配した豪族である三村氏が知られる所である。

2．清水寺の歴史

寺伝によると天平元年（729年）の春、釋行基が廻って来られ、自ら千手観音の尊像を彫って安置し創建したと言われ、その後延暦年間に坂上田村麻呂が蝦夷征伐の際、この千手観音に戦勝祈願をしたところ、霊験あらたかであったため、この尊像を京の都へ移し京都東山清水寺が創建されたという。坂上田村麻呂伝承は県内多くの寺院が有しており、これを信じることは到底できない。創建を知ることは史料の面からも、遺物の面からも難しいが、隣町の波田町にある若澤寺跡の総合調査成果等から、平安時代にまで遡るのではないかとの指摘がなされている。

史料の面から寺の存在を確認できるのは戦国時代に至ってからである。伊那箕輪城主藤原頼親が天正10年（1582）に、「観音仏供免壱貫二百文」「山屋しき共ニ」と書かれた安堵状を法借寺（宝積寺）に出しており、これが清水寺をさすと考えられている。なお同様の安堵状が同年に小笠原貞慶からも出されている。江戸時代になってから書かれた村内旧家に伝わる家伝書に、清水寺に関する言い伝えが記述されている。この中に1682年に再び千手観音を勧請すべく、京都清水寺の千手観音像をそのままに造像安置し、清水寺と名づけたとの記述がある。現在寺に残されている本尊千手観音像は江戸時代の製作と鑑定されており、この記述に合致する。また以後のことは旧家に残された古文書から知ることができるが、檀家を持たない祈願寺であったことから、度々荒廃にさらされていたことが分かる。「中古以来諸堂破壊に及び、仏具やその他日用の諸道具まで悉く損失してしまい、一人の僧の住むことも難しく、断絶同様になってしまった。そこで村内の者が集まり、至って小さな本堂を仮立てにし、漸く本尊の風雨を防ぐばかりの有様であった。従ってここに住む僧もなく、自然村内総持ちの寺といいならわしていたが、だんだん仮堂の修理さえ続かなくなって、後には土台ばかりが残るほどに荒れ果ててしまった」とある。これを救ったのが宝永６年（1709年）に堂守となった禅心である。竹田村名主清原市五郎の享保11年（1726年）の年日記覚帳に、「善心坊此度くわんおんどう建立に付」とあり、これが今日まで残る本堂である。また同日記の享保12年の記述に、「小坂・大池両村持清水観音様御堂建立出来候に付、大池村の衆中かん念仏初め廻りに付き、（中略）白米〆六石七斗、銭八百文出来申し候」とあり、この喜捨等をもとに梵鐘が作られた。この梵鐘は権現原いいの山（現在の中大池信号機から南東方にあったと言われる小さな丘）で作られ、これを記念した石碑が現在も現地近くに立っている。他にも享保元年に石造聖観音像、享保４年に石造毘沙門天像、享保11年に山門、享保15年に石造三重塔、享保18年に六地蔵等々、今日まで残るものは彼の尽力による所が大きい。

彼が没した享保20年（1735年）以降は、また荒廃がすすんだというが、19年後の宝暦４年（1754年）には光賢が堂守となる。光賢は諸堂の修復をした上、資産づくりにも奔走した。また光賢は、自分が没した後に再び荒廃することを案じ、江戸は芝の増上寺へ末寺になるべく働いた。これに関する古文書が残っているが、実現せず今日に至っている。禅心と光賢は清水寺にとって忘れてはならない住職で、共に中興の祖と呼ばれる。彼らの墓標は、境内位牌堂の裏手にひっそりと立っている。同じ場所には他の住職の墓標もあり、文久元年（1861年）のものには、「当山五世大雄実悟和尚」と刻まれ、光賢を復興第一世として以後５代続いて住職がいたものと解すことが出来る。この間享和３年（1803年）には、13両２朱の経費で山門・鐘楼の修復、嘉永２年（1849年）には、５両１分と白米５俵１斗で本堂・山門・仁王門他を修復している。

この様に清水寺は江戸時代の古文書に記されている様に、「小坂大池両村持」の寺として守られ、諸堂の再建や修復には、住民が資金を出してきた。現在は保存会が組織され、会員の拠出と、村からの文化財保護補助金によって維持管理が図られている。

第３図　遺構全体図（S＝1/60）

Ⅲ　調査の結果

1．調査の概要

今回の調査は、平成15年度に行われた位牌堂建設に伴う発掘（第Ⅰ次、特筆する成果はなし）に次ぐ２回目の発掘調査であることから、第Ⅱ次調査とした。調査では現存していた庫裏の礎石が地表に現れていたことから、重機は用いずすべて手掘りにて掘削作業を行った。また北から南へ向かって傾斜する斜面の山側を削り、谷側へ埋め立て平坦地を造成し、寺院の諸堂を建立していることが予想されたため、深掘トレンチを設定しその状況を確認すると共に、調査する面を探った。今まで存在していた庫裏を建築する際の整地面の５㎝程度下層に、江戸時代に建物が建てられたときの整地面が存在しており、まずここまでの土を除去した。以下はトレンチの南側、GLマイナス90㎝程の深さで焼土を認め、ロームブロックを含む暗褐色土（第５図15層）を搬入し整地していると思われたが、調査区域外の南側へトレンチを延長し追認する訳にも行かず、明確にすることはできなかった。またこの深さまで工事による掘削が及ばないことから、面的に広げての調査は行っていない。さらに下位の深さ1.5m程、赤土の地山層上面にて人為的に掘られた遺構を発見したが、これも同様な理由から面的に広げての調査は行わず、そのまま保存することとした。

調査範囲は工事によって掘削される約200㎡とし、磁北方向に沿って任意のグリッドを設定し、測量記録を行った。調査で用いた標高値については、近隣に正確な数値が分かる地点がなく、また専門業者へ測量委託する予算もなかったため、2500分の１スケールの村図に記された標高値を採用し、その値を清水寺管理棟前にあるマンホールの天場と仮定したものを用いている。遺物の取り上げは、全点記録を求められる所であるが、限られた期間と人員では完全実施を望める状況になく、完形品や銅製品等を除いてグリッド単位での取り上げとせざるを得ない状況であった。遺構等の測量記録は概ね1/20スケールで作成した。写真撮影はカラーリバーサルフィルムと白黒ネガフィルムを使用し、35㎜カメラで撮影した。

2．層序

清水寺遺跡は先述のとおり北から南へ傾斜する斜面に位置し、寺院の諸堂建立時に山側を削り谷側へ埋め立て平坦地を造成したものと思われ、調査地点は北側の削り出した斜面に近い場所となる。調査では南北方向に深掘トレンチを１本設定し層序を確認（第５図）した。なお他にもトレンチを設定したいところであったが、建築される施設の基礎強度に影響を及ぼすとのことで、断念せざるを得なかった。

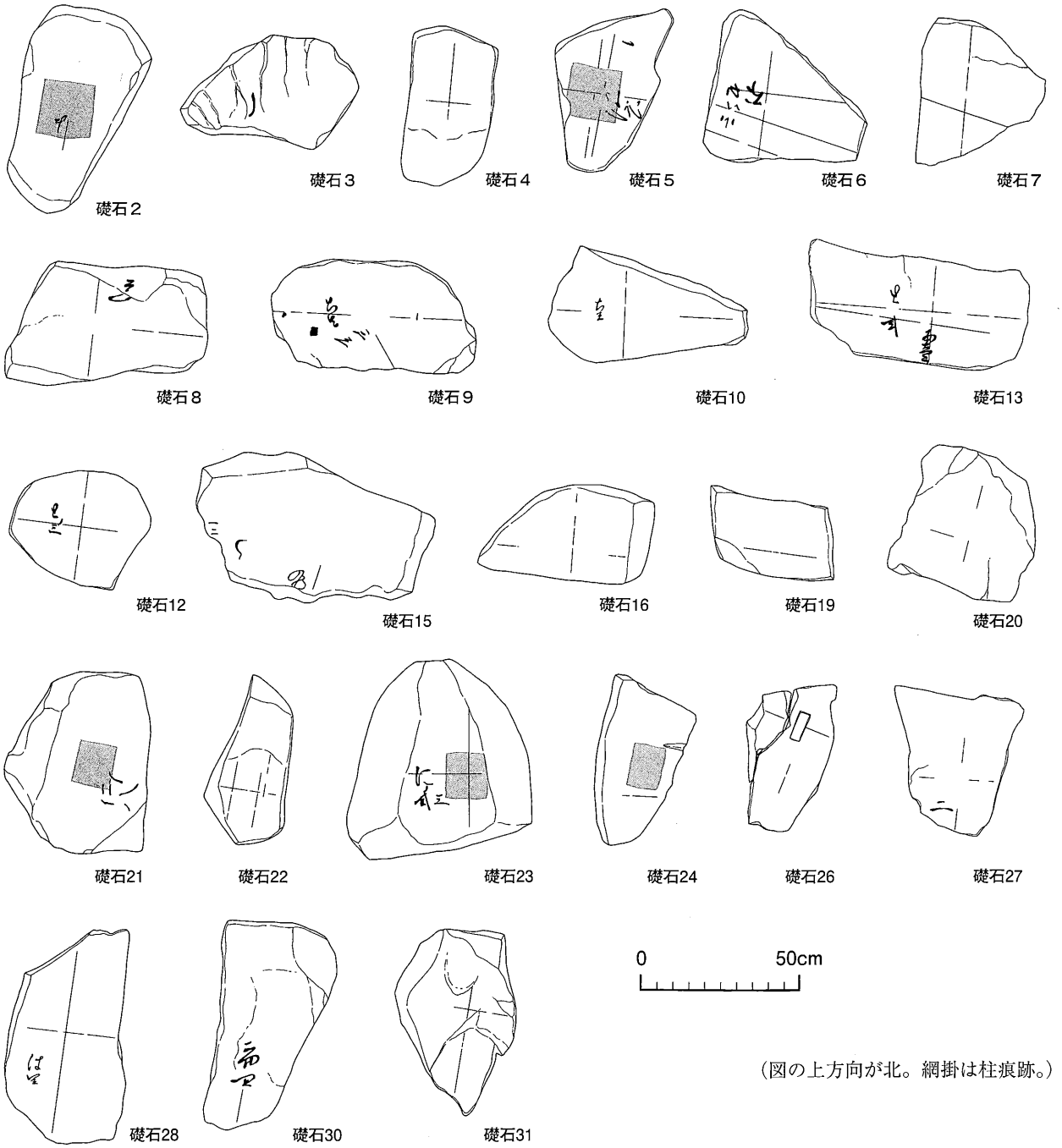
トレンチの北側は近代の営繕（水道やブロック壁など）により数度掘り返されてはいるが、トレンチ北側半分の範囲は地山が削られていると見られ、縄文時代の遺物を包含する28層より北側がこれに該当すると考えられる。南端で検出した平安時代の竪穴式住居址が廃棄された後の窪地へは、自然に土が流れ込み徐々に埋没していった状況を呈し、相当期間放置されていたものと推測される。ロームブロック混じりの暗褐色土層である15層上面では焼土（14層）が確認されており、平坦面を意識した整地がなされた様にも見える。この上面にのる黒褐色土層中からは、内耳鍋片等が僅かながら認められたので、この段階で土地の造成を行い、寺院関連施設が作られたのかもしれないが、今回の調査範囲で明確にすることはできなかった。11層はシルト質の褐色土で、かなりの土量を搬入し平坦になる様敷きならし、礎石を有す建物を建立したものと考えられる。詳細は後述するが、出土遺物から18世紀末～19世紀初頭と判断される。４層は薄く堆積した締まりのない黒色土層で、落葉等の痕跡が残る腐葉土状の土であり、この建物の床下に溜まった塵状のものではないかと思われる。３層には陶磁器や金属製品等の遺物を大量に含む。現存していた庫裏を建築する際（明治８年）に、江戸時代に建てられた建物で使っていた道具類をゴミとして処分するため、土砂と共に敷きならしたものと考えられる。

3．検出遺構

今回の調査地では、現存していた庫裏の礎石、江戸時代に建てられた礎石建物址、深掘トレンチ内の限られた検出であったが平安時代の竪穴式住居址が発見された。以下詳細を記述するが、現存していた庫裏の礎石については、平面図のみの掲載とし記述は省略する。

(1) 礎石建物址

現存していた庫裏の床下に積もったパウダー状の塵や建物取り壊し後の残渣が、現存していた庫裏の礎石を覆うようにして堆積していたので、まずこれらを除去し石の並びを露出させるべく作業を進めた。この際に、現存していた庫裏の礎石よりもレベル的に低い位置から礎石らしき石が顔をのぞかせた。この時点でより古い時期の礎石建物址が存在することに気付き、深掘トレンチでの断面観察で整地面が認められたため、



（図の上方向が北。網掛は柱痕跡。）

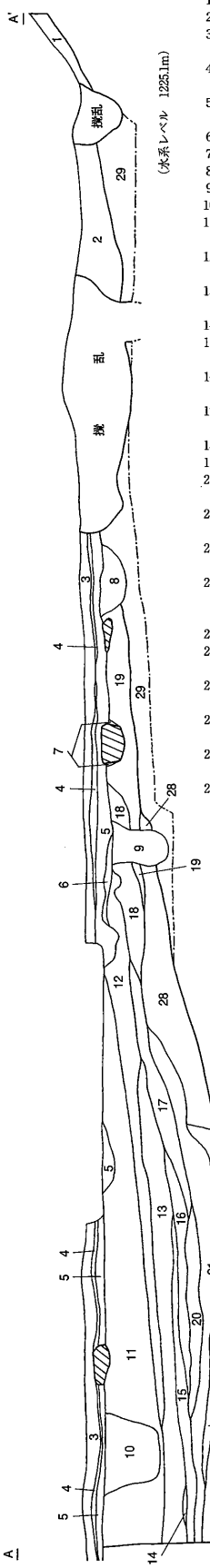
第４図　墨書及び墨打ち線のある礎石

この礎石建物址を明らかにすべく全域の掘り下げを行った。この整地面は先述のとおり、シルト質の褐色土をレベル的に低い南側へ盛り整地が行われたものと見られるが、地面を叩き締めた様子は無く、普通の地面と変わらない硬さである。土間も確認できなかったが、建物址の南東側は現存していた庫裏の土間下となり、ゴミの埋め立て等による数回の掘り返しによって広範囲が撹乱されていたので、あるいはこちらにあったのかもしれない。

礎石は32点を確認した。南東側はひどく撹乱されていたのでほとんど残っておらず、またそれ以外の範囲でも石を抜き取った穴が6箇所で確認された。平面規模は南北方向6.5m程、東西方向14m程で、礎石及び礎石の抜き取り穴は概ね碁盤目を呈して並んでいるが、間隔も軸も一様でない。礎石は大きいもので長軸75cm程度、小さいもので長軸40cm程度を測り、重さは計測できなかったものの、簡単に持ち上げられるものから人力では到底動かすのも難しいものまで様々な大きさのものがあり規格性は認めがたい。柱をのせる箇所は平坦になる様に向きを調整して石を据えたと思われ、加工による平坦面や窪みはいずれにも認められなかった。礎石上部の平坦面のレベル値は最も高いものが礎石2の1224.5m、最も低いものは礎石29の1224.33mで、平均値は1224.39mである。

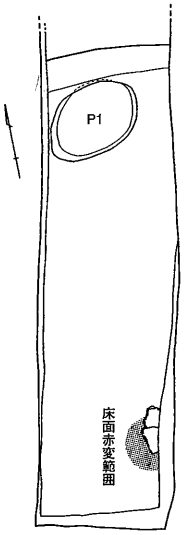
32点の礎石の内、24点に墨打ち線もしくは墨書を認めた（第4図）。なお現存していた庫裏の礎石にはほとんどこれを認めなかったので、どちらに伴う礎石かを判別する材料となった。墨書は礎石2・3・5・6・8・9・10・12・13・15・21・23・27・28・30の15点に、墨打ち線は礎石2・4～10・12・13・15・16・19・20・22～24・26～28・30・31の22点に認められる。墨書は不鮮明となり判読するのが難しいものもあるが、礎石5の「仁（に）六」、礎石12の「とノ三」、礎石13の「と弍（三）」、礎石21の「仁（に）ノ八」、礎石23の「に弍（三）三」、礎石28の「は四」等から、礎石の位置を示すために書いた記号と認識することができる。但しその場合、一方向には「いろはにほへ

深掘トレンチセクション図



1：落葉や枯枝等、腐葉土層
2：10YR3/3　暗褐　締まりやや有、粘性有　近代の盛土層か
3：10YR4/3　にぶい黄褐　締まり・粘性やや有　3～20mm小石多く含む　陶磁器等の遺物多く含む
4：10YR2/1　黒　締まり・粘性なし　腐葉土層で所々に焼土や炭化材が混じる
5：10YR4/3　にぶい黄褐　締まり・粘性やや有　3～20mm小石多く含む
6：10YR2/1　黒　締まり・粘性なし　腐葉土層
7：10YR4/3　にぶい黄褐　締まり有、粘性なし
8：10YR3/3　暗褐　締まり・粘性なし
9：木材の腐食したもの、何らかの柱痕跡か
10：10YR2/2　黒褐　締まりなし、粘性やや有
11：10YR4/6　褐　締まりなし　シルト質　3～5mmの小石が所々縞状に貫入
12：10YR2/2　黒褐　締まり弱、粘性なし　ボソボソとしていてブロック状
13：10YR3/2　黒褐　締まり・粘性やや有　1～2mmローム粒・炭粒少量含む
14：5YR4/6　赤褐　焼土層
15：10YR3/3　暗褐　締まり・粘性やや有　1～2mmローム粒中量、3～10mmロームブロック15%含む
16：10YR3/2　黒褐　締まり・粘性やや有　1～2mmローム粒少量含む
17：10YR3/3　暗褐　締まりやや有、粘性有　1mmローム粒微量含む
18：10YR4/3　にぶい黄褐　締まり弱、粘性有
19：10YR3/3　暗褐　締まり・粘性やや有　3～5mm小石少量含む
20：10YR3/3　暗褐　締まり弱、粘性有　1～2mmローム粒多量、3～10mmロームブロック15%含む
21：10YR3/2　黒褐　締まりやや有、粘性有　1～2mmローム粒少量含む
22：10YR3/3　暗褐　締まり弱、粘性有　1～2mmローム粒多量、3～10mmロームブロック20%含む
23：10YR2/2　黒褐　締まりなし、粘性やや有　1～2mmローム粒中量、3～15mmロームブロック7%、炭化材（最大10×5mm）少量含む
24：10YR3/1　黒褐　締まりやや有、粘性有
25：10YR2/1　黒　締まり・粘性やや有　1mmローム粒・炭粒少量含む
26：10YR2/2　黒褐　締まりなし、粘性有　1～2mmローム粒中量、3～10mmロームブロック10%含む
27：10YR3/1　黒褐　締まり強、粘性やや有　3～5mmロームブロック2%含む
28：10YR2/1　黒　締まり弱、粘性やや有　1～2mmローム粒少量含む　縄文期の遺物を僅か含む
29：7.5YR5/6　明褐　締まり強、粘性有　地山層

竪穴式住居址平面図



0　2m

第5図　深掘トレンチ遺構図

第６図　絵図「信濃国筑摩郡西山清水図」

と…」、それに直行する方向には「一二三四五六…」と順番に並ぶはずであるが、今回発見した礎石に規則性は認められない。また二重に墨打ち線を有す礎石がある（礎石５・６等）こと、何かの石造物の台座となっていたと思われる抉りを有す礎石もある（礎石14・26）ことから、他の建物で用いていた礎石等を転用した可能性が高い。また墨書には他に、建物の名称とも受け取れる「西堂」らしきもの（礎石13）や、数字の「一」や「二」のみが書かれたもの（礎石３・27）があり、礎石９には墨を垂らした跡も認めた。

柱が据えられていた範囲だけ石の表面が変色している礎石（２・５・21・23・24）があり、その大きさが概ね15cm四方程度であることから、柱は５寸の角柱であったと想定される。また礎石は人力で動かすのが厳しい重いものばかりであったため、掘方を有すか否かをしっかり確認できていない。それでも動かすことができた礎石に明瞭な掘方は無く、概ね石を据えるため必要最小限に地面を掘り窪めたものと判断される。同様に栗石を有すか否かもすべて確認していないが、動かすことができた礎石に認めることはできなかった。

この礎石建物址の性格であるが、幕末に作成されたと考えられる絵図（第６図）に「庫下（くか）」と記された建物が本堂の北隣に見える。絵図とまったく同じ柱配置ではないが、建物の長軸方向は同じであり、これに該当すると考えて差し障りないと考える。なお「庫下」は庫裏と同じ様な意味であり、江戸時代からこのスペースは同じ目的で使用されてきていたことになる。

(2) 竪穴式住居址

深掘トレンチの南端、地表下約1.5mにて確認した。調査したのはトレンチ幅の約１mのみで、北側の壁は確認できたが、南側の壁は調査区域外となる。遺構は縄文時代の遺物包含層である28層を切る形で掘り込まれ、床面までの深さは北壁で70cm程度を測る。検出した範囲で南西側の床面は幾分硬化していたが、全体的には軟弱で、地山層を掘り込んでそのまま床面としている。検出範囲の南東端に床面が赤変している範囲があり、石も２つまとまっていたことから、調査区域外の東側にカマドが存在している可能性がある。床面で80×55cm、深さ30cmのピット１基を検出し、この覆土内から土師器杯１点（第７図３）が出土した。他に覆土中から土師器杯１点（６）が、中央付近の床面にほぼ接した位置で土師器杯２点（４・５）と土師器盤３点（７～９）が出土している。これら出土遺物から、帰属時期は平安時代10世紀末と判断される。

４．出土遺物

今回の調査で出土した遺物は、近世の陶磁器や銭貨等の金属製品等がほとんどである。また深掘トレンチの各層位から土師器、中世土器片、縄文土器片、黒曜石剥片が少量出土している。以下概略を記す。

(1) 縄文時代の遺物

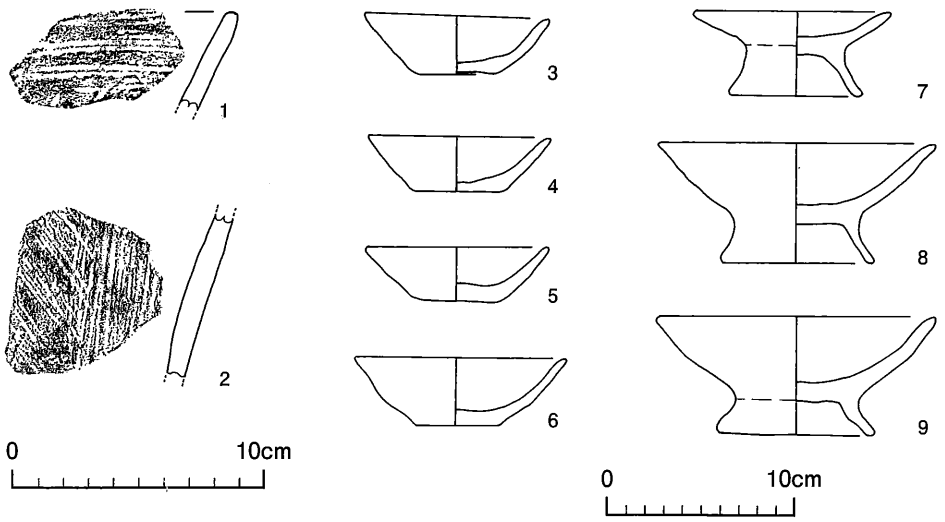
深掘トレンチの28層（第５図）と平安時代竪穴式住居址の覆土中から、10数点の土器片と数点の黒曜石剥片が出土した。第７図１・２の２点を図化掲示した。半截竹管による沈線文及び結節浮線文を施文したもので、前期諸磯式期に比定される。

(2) 平安時代の遺物

深掘トレンチでごく一部のみを確認した竪穴式住居址から出土したものがほとんどである。第７図３～６の土師器杯４点、同７～９の土師器盤３点を図化掲示した。いずれも10世紀末のものと思われる。またこれらとは別の層位から、より古い時期らしい土器片を数点認めたが、いずれも細片であり断定は難しい。

(3) 中世の遺物

深掘トレンチの11層下位、黒褐色土層（12層か13層）から出土した。平安時代住居址の上層、江戸時代建物址の下層であることから、中世（14世紀代か）の遺物と判断したが、いずれも小片であり疑問符が付いてしまう。内耳鍋片３点とカワラケ片２点を認めた。



第７図　深掘トレンチ出土遺物

(4) 江戸時代の遺物

調査範囲の全域から陶磁器、金属製品等、コンテナ４箱分程の遺物が出土した。これは現存していた庫裏を建築する際に、先述の礎石建物址（庫下）で使っていた道具類をゴミとして処分するため、土砂と共に敷きならしたものと考えられ、第５図の３層を中心として出土したものである。

① 陶磁器（第８・９図、第１表）

主に出土したのは陶磁器である。42点を図化掲示した。茶碗や皿等の食器類、捏鉢や擂鉢等の調理具が多い。寺院特有の仏具は認められず、調査範囲が庫裏といった使われ方をしていた範囲であるという性格上、寺を訪れる人々を歓待するために備えられていたものと考えられる。

最も多いのは湯呑茶碗である。３・21～23は瀬戸美濃産陶胎染付の端反碗で、口縁部の両側に漬け掛けによる薄い青色釉が入る。いずれも同一手法による似た作りのもので、数個のセットで所有していたものと思われ、図化していない同様の破片も出土している。瀬戸美濃産陶器の８・13は、赤や白の色絵によって笹葉を描いた京焼系の丸碗で、細かな貫入が器面全体にある。風景を描いたと思われる９も同様な作りである。丸碗は他に、肥前産磁器で四方襷文と菊花文を付けた12、瀬戸美濃産陶器で陶胎染付によってススキを描いた14、同じく富士山、龍を描いた11等がある。筒碗は、瀬戸美濃産陶胎染付陶器で外面に草、内面見込部に梅鉢を描いた17、同じく外面に草花や生垣、内面見込部に五弁花文と二重丸を描いた18がある。

碗は数が少ない。瀬戸美濃産陶器で鉄釉の上に長石釉を飛ばし掛け、体部に窪みをつけたげんこつ碗と呼ばれる24・25、鉄釉の瀬戸美濃産陶器の丸碗で高台部に「合」の字の銘印がある26、瀬戸美濃産磁器で外面に鳥を描いた広東碗と呼ばれる形状の15、飯碗と思われる肥前産磁器の19や瀬戸美濃産磁器の10等が出土している。また碗蓋の20は、外面に馬と松、内面に四方襷文を染め付けたもので、瀬戸美濃産磁器である。

皿は口径が12～13cm、高さ２～３cmの小型皿のみを図化したが、これよりも大きいと思われる皿の破片も少なからず出土している。27は肥前産磁器で、内面胴部に矢羽根文、見込部にコンニャク印判による五弁花文、外面胴部に唐草文が描かれ、底部にうず福銘がある。28は口縁部が輪花状に作られた肥前産染付皿で、胴部内面にたこ唐草文、見込部に松竹梅が円環形に配され、外面には唐草文が描かれる。29は瀬戸美濃産陶胎染付皿で、内面見込部に菊花文が描かれ、蛇の目釉剥ぎがある。

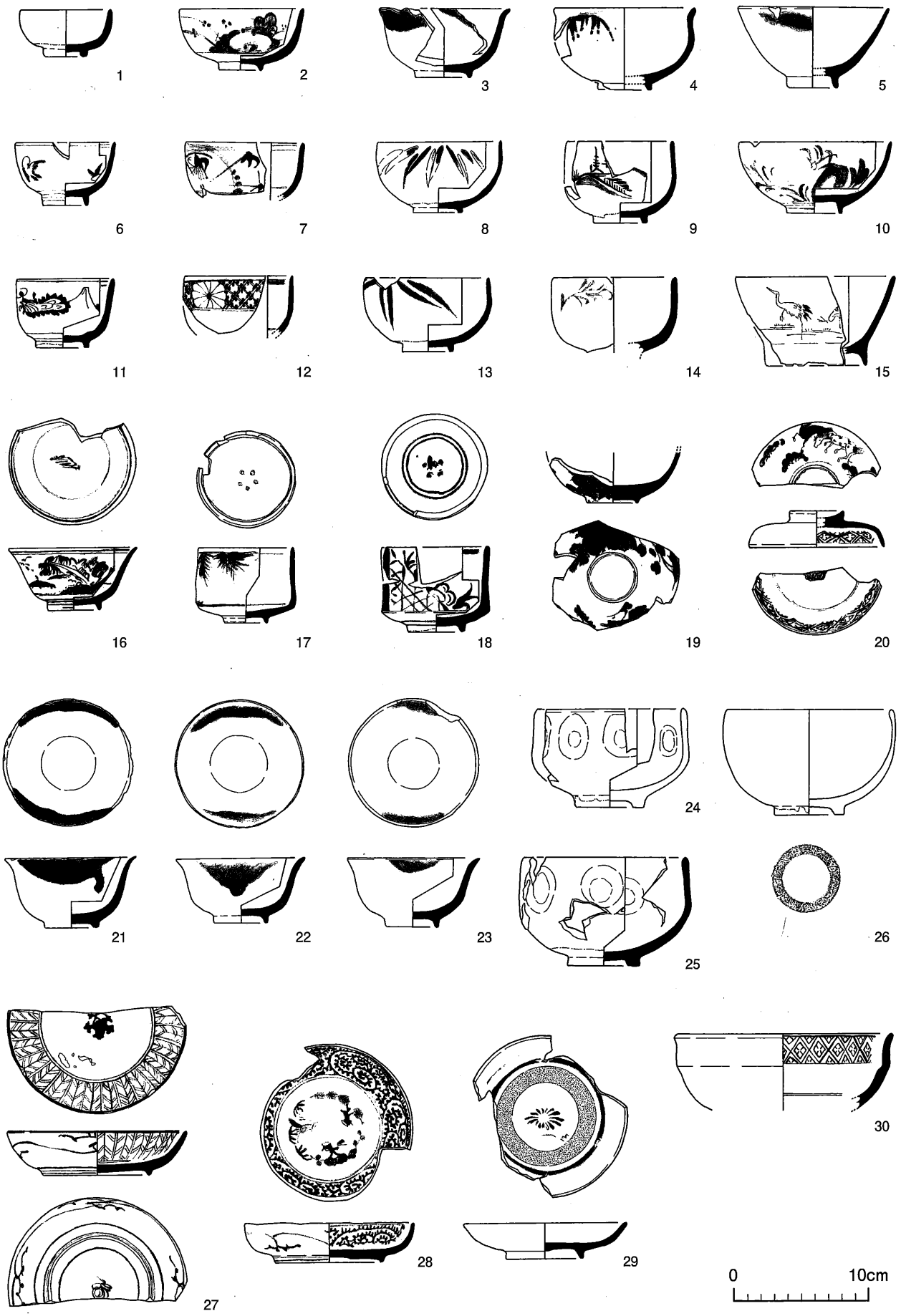
皿はこの他に、鉄釉施釉で口径が10cm程、外面にロクロ整形による段差が明瞭な瀬戸美濃産陶器の皿（40～42）が多く出土しており、ススが付着していることから灯明皿として用いられたと思われる。灯明具はたんころ（38・39）も出土している。

これ以外を列記していくと、１は瀬戸美濃産陶器の小杯である。杯はあまり出土していない。30は青磁染付鉢で、内面には四方襷文が描かれる。31は瀬戸美濃産陶器の鍋で、口縁部に把手の剥離痕が認められ、底部の３方に小さな脚が付く。32は陶器の捏鉢で底部のみが残存し、釉剥がなされているものである。図化はしていないが捏鉢の破片は他に多く出土している。33は擂鉢で、口縁部内面に丸に「大」の字らしき銘印がある。擂鉢も図化していない破片が他に多くある。34は瀬戸美濃産磁器の御神酒徳利で、器高は5.9cmしかない小型のものである。36は外面にたこ唐草文が染付された肥前産磁器の仏飯器で、37は同一固体ではないが同仏飯器の脚である。34～36は仏具であるが、一般的な民家でも発見されるもので、寺院特有の遺物とは言えない。35は貝の形に成形された磁器の紅皿である。他に図化できなかった破片の中には、徳利、筆挿、土瓶もしくは急須、花瓶が見られた。

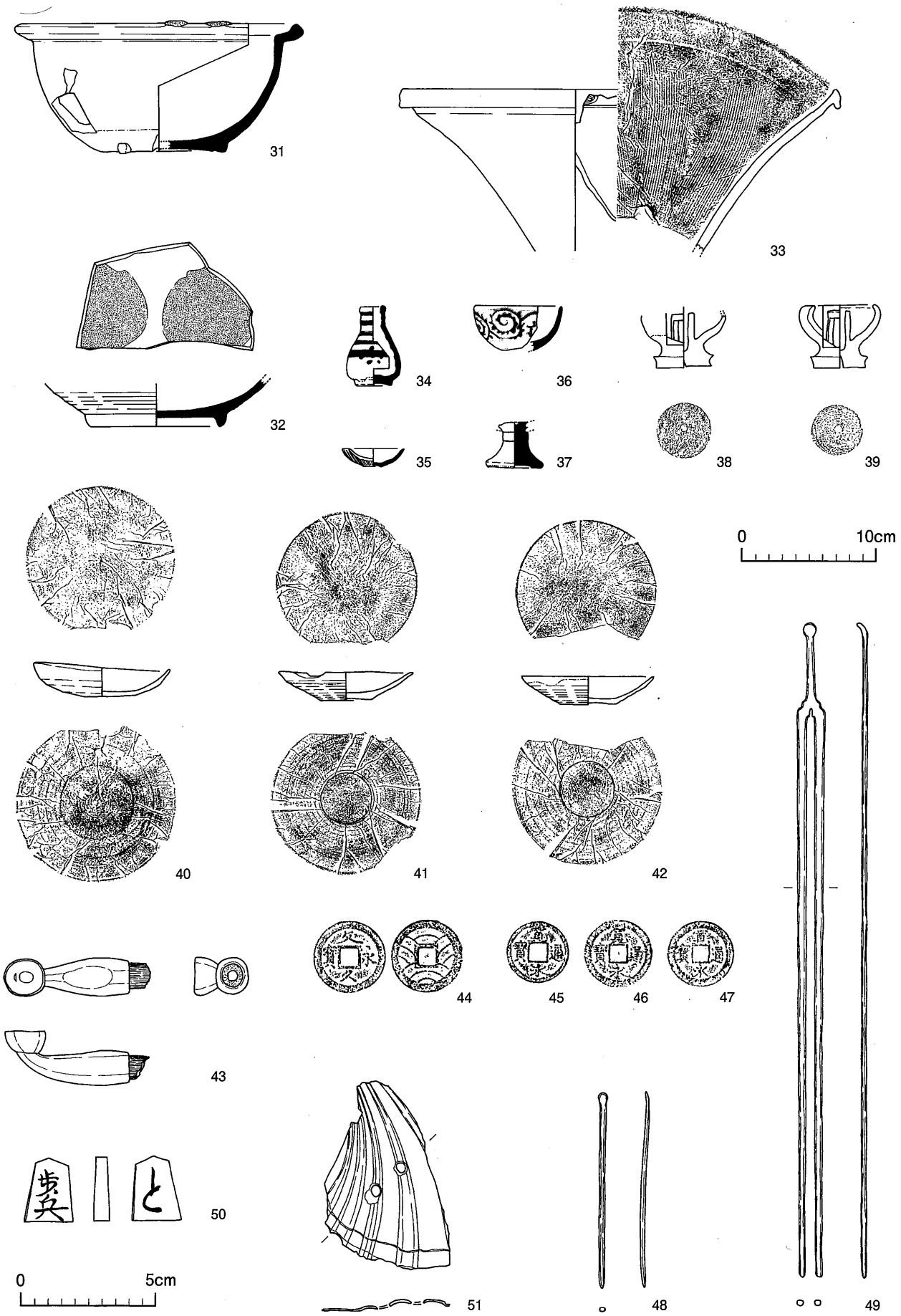
これらの陶磁器であるが、18世紀のおわりから19世紀のはじめのものが多い。礎石建物址が建てられた際に、陶磁器等を一式揃えたと思われるので、この時期に集中する傾向があるものと判断される。

② 金属製品

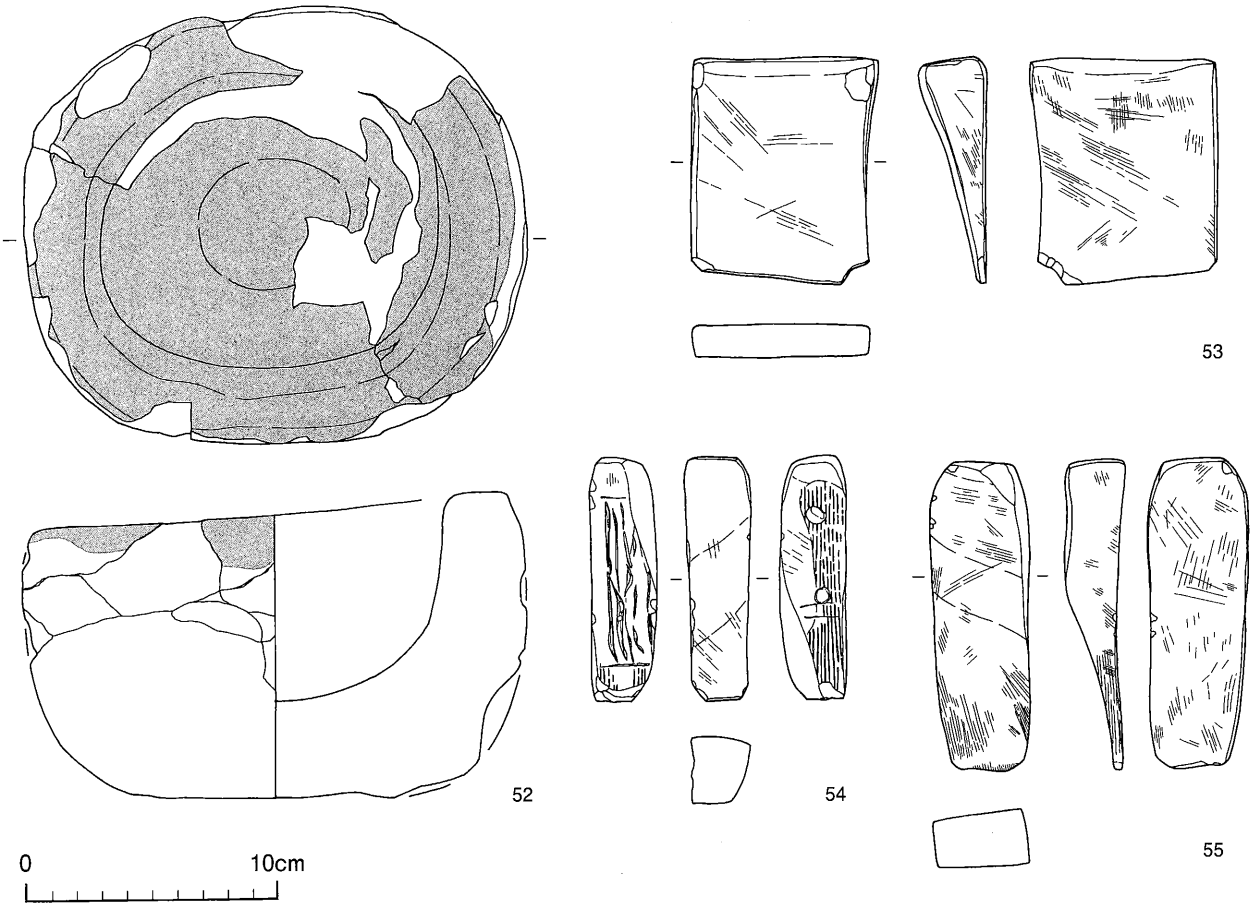
銭が109枚出土（第９図44～47等）している。「文久永宝」が２枚だけあったが他は「寛永通宝」で、錆び



第８図　江戸時代の遺物（１）



第９図　江戸時代の遺物（２）



第10図　江戸時代の遺物（3）

て字の判読が難しいものもあったので、銅銭のみでなく鉄銭も混じっていると思われる。寛永通宝は一文銭ばかりで、１点のみ背に波型のある四文銭が出土している。これらは調査区の全域からまとまることなくバラバラに出土したもので、建前の際に銭を撒いたのではないかと想像される。明治８年、現存していた庫裏を建築する際に撒かれたと考えるのが妥当かと思われる。

他には銅製のきせる雁首（43)、銅製の耳掻き（48)、銅製のかんざし（49）が各１点出土した。なお鉄製品も少なからず出土しているが、予算的な都合から保存処理等の整理作業を行うことができず、詳細な観察はしていない。

③　石製品・その他

第10図52は、径19cm、高さ12cm程を測る砂岩製の搗臼状石製品で、著しく被熱赤化し脆くなり、バラバラな状態で出土した。灯明具として明治・大正期までこの辺の民家でも使用されていたヒデ鉢ではないか、または寺院という場所であることから護摩鉢ではないか、もしくは他のものかと類似品を探したが、結局資料を探すことが出来ず、これといった確証が得られなかったので、不明石製品と報告しておきたい。53～55は砥石で、擦痕が顕著で良く使い込まれており、かなり磨耗している。この内54はゴザ目が残っている凝灰岩製のもので、松本城下町跡本町でも大量に発見された上州戸沢産（群馬県南牧村）の砥石かと思われる。

上記の他に、木製の将棋駒（第９図50)、貝殻に穴を空けて柄を付け杓子として使ったと思われる貝製品（同51）を図化掲示した。

第１表　図化陶磁器観察表

No.	出土位置	種別	器種	法量（cm）			残存度	胎土	釉調	技法・文様・形態の特徴	推定年代	産地
				口径	底径	器高						
1	E9N3、E9N6、E12N3、E12N6の３ｍ四方グリッド	陶器	小杯	6.8	3.1	3.5	口縁部一部欠	淡黄灰色	灰	貫入	19c前～中	瀬戸美濃
2	陶磁器No.２	陶器	丸碗	9.2	(3.3)	4.6	口縁～体部1/2欠	白色	染付	陶胎染付／梅ノ木文／貫入あり	19c前半	瀬戸美濃
3	E15N9、E18N9、E15N12、E18N12の３ｍ四方グリッド	陶器	端反碗	(9.8)	4.0	5.2	口縁部～体部1/2欠	淡灰褐色	透明	陶胎染付／口縁部２ヶ所に青色釉の漬掛あり	19c初	瀬戸美濃
4	トレンチ表層土	陶器	丸碗	(10.2)	(4.0)	6.1	口縁部～底部2/5残	淡赤灰色	灰	鉄絵／笹		
5	E12N6、E12N9、E15N6、E15N9の３ｍ四方グリッド	磁器	碗	11.0	(3.5)	6.0	口縁部～底部1/2残	白色	透明	うがい碗か？		
6	E12N0、N15N0、E12N3、E15N3の３ｍ四方グリッド	磁器	丸碗	7.4	3.3	4.7	口縁一部欠	灰白色	染付	鳥／笹		
7	E12N9、E15N9、E12N12、E15N12の３ｍ四方グリッド	磁器	丸碗	(8.6)	－	(4.1)	口縁部～体部1/3残	灰色	染付	笹		瀬戸美濃
8	アゼ（東西）中	陶器	丸碗	9.2	3.6	5.3	口縁部1/7欠	黄灰色	上絵	上絵付による色絵（赤・白）／細かい貫入　京焼系　口縁部に焼継痕あり	19c前半	瀬戸美濃
9	E15N9、E18N9、E15N12、E18N12の３ｍ四方グリッド	陶器	丸碗	(7.7)	3.9	6.1	口縁部～体部4/5欠	黄灰色	上絵	上絵付による色絵／風景？（赤・白または銀）／細かい貫入　京焼系	19c前半	瀬戸美濃
10	調査区北端拡張時	磁器	丸碗	11.2	4.1	5.3	口縁～底部1/2残	白色	染付	草花文		
11	トレンチ表層土（中央）	陶器	丸碗	7.2	3.8	5.2	口縁一部欠	淡黄灰白色	染付	陶胎染付／山／龍／宝珠	18c末～19c初	瀬戸美濃
12	E9N9、E9N12、E12N9、E12N12の３ｍ四方グリッド	磁器	丸碗	(7.9)	－	(4.3)	口縁部～体部1/3残	灰白色	染付	四方襷文／菊花文	19c前半	肥前
13	E9N3、E9N6、E12N3、E12N6の３ｍ四方グリッド	陶器	丸碗	9.6	3.8	5.5	口縁部～体部1/2欠	淡黄灰色	上絵	上絵付による色絵（赤・緑・白または銀）／細かい貫入　京焼系	19c前半	瀬戸美濃
14	E12N6、E15N6、E12N3、E15N3の３ｍ四方グリッド	陶器	丸碗	(8.9)	－	(5.6)	口縁部～体部2/5残	淡黄灰白色	染付	陶胎染付／ススキ	19c前半	瀬戸美濃
15	E12N6、E12N9、E15N6、E15N9の３ｍ四方グリッド	磁器	広東碗	(11.8)	6.6	(7.6)	口縁部～高台1/4残	白色	染付	鷺（鶴？）		瀬戸美濃
16	E9N9、E9N12、E12N9、E12N12の３ｍ四方グリッド	磁器	端反碗	9.4	3.8	4.6	口縁～体部1/3欠	白色	染付	山水文		
17	E15N9、E18N9、E15N12、E18N12の３ｍ四方グリッド	陶器	筒碗	6.9	5.6	3.2	口縁部～体部1/5欠	灰色	染付	陶胎染付　外：草文　内：梅鉢		瀬戸美濃
18	E12N6、E15N6、E12N9、E15N9の３ｍ四方グリッド	陶器	筒碗	(8.0)	4.2	6.3	口縁～体部5/6欠	淡黄灰白色	染付	陶胎染付　外：草花 他　内：五弁花文／二重丸	19c前半	瀬戸美濃
19	E9N3、E9N6、E12N3、E12N6の３ｍ四方グリッド	磁器	丸碗	－	3.8	(3.8)	底部～体部のみ残	灰白色	染付	草花文	18c後半	肥前
20	E12N6、E12N9、E15N6、E15N9の３ｍ四方グリッド	磁器	碗蓋	10.0	－	2.7	1/2残	白色	染付	外：馬／松　内：四方襷文　蓋つまみ部径：4.0cm	19c前半	瀬戸美濃
21	陶磁器No.３	陶器	端反碗	9.6	4.0	5.2	完形	淡黄灰褐色	透明	陶胎染付／口縁部２ヶ所に青色釉の漬掛あり	19c初	瀬戸美濃
22	陶磁器No.４	陶器	端反碗	9.4	4.0	4.8	完形	淡灰褐色	透明	陶胎染付／口縁部２ヶ所に青色釉の漬掛あり	19c初	瀬戸美濃
23	陶磁器No.６	陶器	端反碗	9.7	3.8	5.1	完形	淡灰褐色	透明	陶胎染付／口縁部２ヶ所に青色釉の漬掛あり	19c初	瀬戸美濃
24	E15N9、E18N9、E15N12、E18N12の３ｍ四方グリッド	陶器	げんこつ碗	10.4	7.3	5.1	口縁部～体部3/5欠	淡灰褐色	鉄	胴部に窪み数箇所	18c～19c末	瀬戸美濃
25	E9N3、E9N6、E6N3、E6N6の３ｍ四方グリッド	陶器	げんこつ碗	12.0	5.3	8.0	口縁部～体部2/5欠	灰白色	鉄	胴部に窪み数箇所	18c末～19c前半	瀬戸美濃
26	E15N9、E18N9、E15N12、E18N12の３ｍ四方グリッド	陶器	丸碗	12.4	7.7	5.1	口縁部～体部1/2欠	灰色	鉄	細かいまだら模様あり（油滴？）　高台部に銘印（○に合？）	18c末～19c初頭	瀬戸美濃
27	E12N9、E15N9、E12N12、E15N12の３ｍ四方グリッド	磁器	皿	13.2	7.9	3.2	口縁部～底部1/2欠	白色	染付	外：唐草文　内：矢羽根文／五弁花文（こんにゃく印判）　底部：渦福銘　ス ス付着あり　灯明皿に転用か	18c末	肥前
28	E12N9、E15N9、E12N12、E15N12の３ｍ四方グリッド	磁器	輪花皿	12.5	7.9	2.9	口縁部～体部3/4欠	灰白色	染付	外：唐草文　内：蛸唐草文／松竹梅円形文　底部／蛇の目凹形高台	19c前半	肥前
29	調査区北端拡張時	陶器	皿	12.1	5.6	2.6	口縁部～体部1/2欠	淡黄灰色	透明	陶胎染付／菊花文／蛇の目釉剥ぎ	18c後半～19c初	瀬戸美濃
30	E15N9、E18N9、E15N12、E18N12の３ｍ四方グリッド	磁器	深鉢	(15.8)	－	(5.6)	口縁部～体部下部1/5残存	白色	青磁／染付	外：青磁釉　内：四方襷文		
31	E9N3、E9N6、E6N3、E6N6の３ｍ四方グリッド	陶器	鍋	21.4	8.0	9.5	口縁部～体部1/6欠	灰白色	鉄	口縁部に把手の剥落痕　３方に脚	19c前半	瀬戸美濃
32	E6N3、E9N3、E6N0、E9N0の３ｍ四方グリッド	陶器	捏鉢	－	9.6	(3.4)	底部1/2のみ残	灰褐色	灰	見込みに不整円形の釉剥ぎ痕複数あり　貫入あり		
33	E15N9、E18N9、E15N12、E18N12の３ｍ四方グリッド	陶器	擂鉢	(32.0)	(10.4)	(12.0)	口縁～体部1/2残	赤褐色	無釉	擂目単位22条		
34	E9N3、E9N6、E12N3、E12N6の３ｍ四方グリッド	磁器	御神酒徳利	2.0	2.7	5.9	体部2/5欠	灰白色	染付／上絵	星梅鉢／上絵付による線描（青）	19c中	瀬戸美濃
35	E12N6、E15N6、E12N3、E15N3の３ｍ四方グリッド	磁器	紅皿	(4.6)	1.3	1.4	口縁部～底部1/4残	白色	透明	貝形の型成形		
36	E15N3、E18N3、E15N6、E18N6の３ｍ四方グリッド	磁器	仏飯器	(6.4)	－	(3.3)	口縁～体部2/5残	灰白色	染付／青磁	外：染付／蛸唐草　内：青磁釉	19c	肥前
37	E9N9、E9N12、E12N9、E12N12の３ｍ四方グリッド	磁器	仏飯器	－	3.9	(3.4)	脚部のみ残	灰白色	染付		19c前半	肥前
38	陶磁器No.１	陶器	たんころ	－	4.1	(4.0)	口縁部全周欠	淡褐色	鉄	底部回転糸切底／穿孔あり	19c初	瀬戸美濃
39	礎石④－１の下敷きになっていたもの	陶器	たんころ	5.0	3.8	4.7	口縁部～体部1/4欠	淡灰褐色	鉄	底部回転糸切底／穿孔あり	19c初	瀬戸美濃
40	陶磁器No.７	陶器	灯明皿	10.1	3.6	2.6	口縁部1/7欠	淡紫灰色	鉄	内外面ともロクロナデ	19c初	瀬戸美濃
41	陶磁器No.５	陶器	灯明皿	10.0	3.8	2.1	口縁部1/3欠	淡灰褐色	鉄	底部回転糸切底／内外面ともロクロナデ	19c初	瀬戸美濃
42	E6N12、E6N9、E3N12、E3N9の３ｍ四方グリッド	陶器	灯明皿	9.8	4.1	2.1	口縁部～体部1/4欠	淡灰褐色	鉄	底部回転糸切底／内外面ともロクロナデ	19c初	瀬戸美濃

Ⅳ　まとめ

今回の発掘調査は、清水寺の歴史を考古学的に探る始めての機会となった。限られた範囲の調査ではあったが、様々な成果が得られた。最後に所見を記しておきたい。

この場所が遺跡として周知される材料となった縄文時代の遺物が僅かながらも得られた。山形村誌に記されているような早期の土器は見つからなかったが、前期の土器片が出土した。第Ⅰ次調査の際にも同時期の遺物が見つかってはいるが、寺の造成による削平が広範囲に及んでいるものと思われ、遺構の検出は難しいものと思われる。

平安時代の竪穴式住居址は、予想もしていない発見であった。寺の創建については、信頼に足る記録がなく、同様な立地にある松本平の諸寺院に関する研究から、平安時代位まで遡れるのではないかと言われる。今回見つかったこの時期の住居址をどの様に考えるか、ごく一部を調査しただけなので、いくつかの解釈ができる所である。また少量ながら見つかった中世の土器片も、何らかの活動が行われていたことを示し、この地が寺院であることを考慮すれば、何らかの宗教行為に伴うものとも考えられる。いずれも判断に迷う所であり、可能性の提示までとしておきたい。

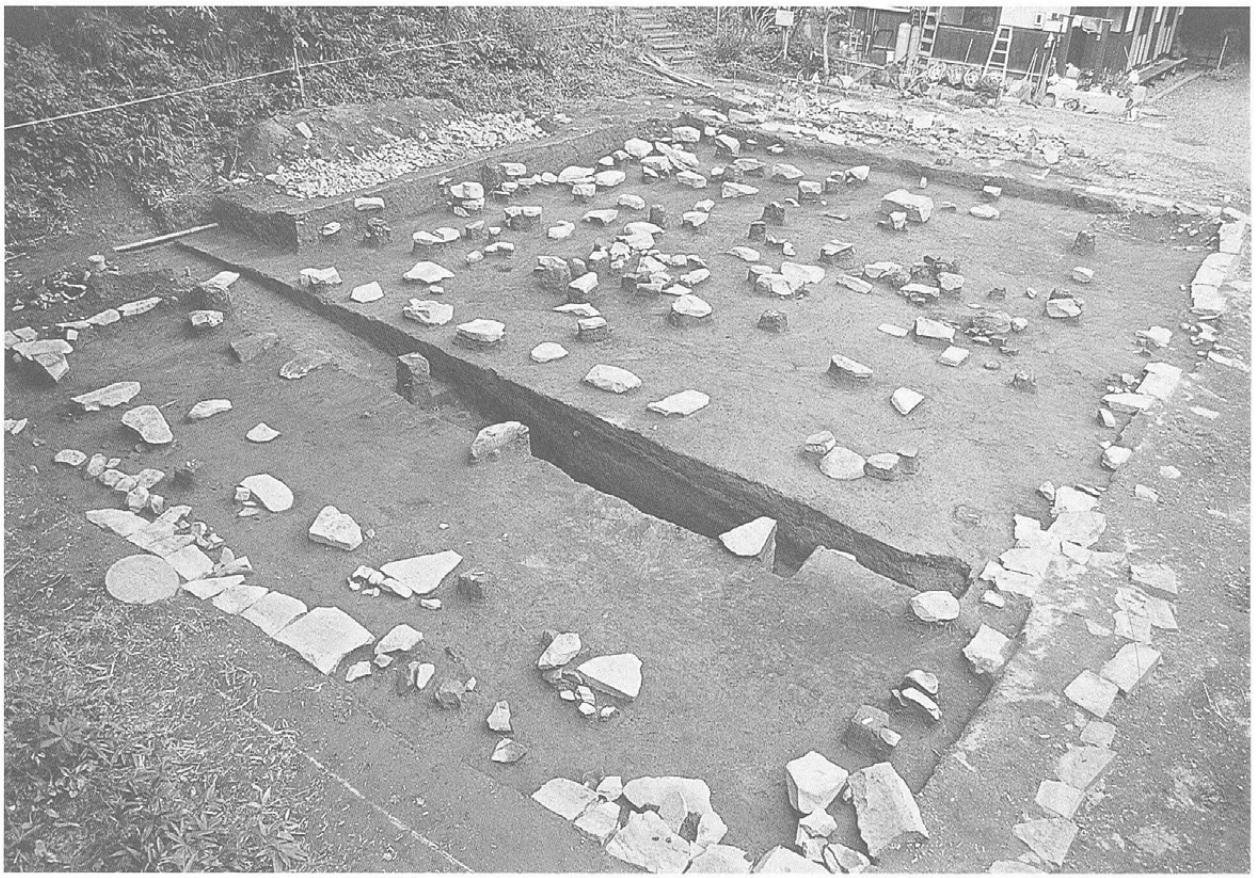
江戸時代の礎石建物址については、文献史料には無いが、絵図に書かれた「庫下」という建物に該当するものと判断される。今まで現存していた庫裏の先代と言う訳である。出土した陶磁器の時期から、建築は18世紀末～19世紀初と判断される。中興の祖である光賢は、諸堂の復興を18世紀の後半に行っているが、これよりはやや新しい。光賢は1794年に没しているが、後の事まで心配した光賢は、寺の財産づくりにも尽力しており、あるいは彼が残した資金を元に、この建物が作られたのかもしれない。

最後となりましたが、今回の調査にご協力いただいた関係者の皆様に感謝申し上げ、本書の締めくくりとします。

第２表　清水寺年表

年　号	記　事
729（天平元年）	【伝承】釋行基、自ら千手観音像を彫りこれを安置して清水寺を開く。
800（延暦19年）	【伝承】坂上田村麻呂、清水千手観音に願をかけ、霊験あらば都へお遷しすると約束する。
805（延暦24年）	【伝承】坂上田村麻呂、僧円珍に頼み、清水千手観音像を背負わせ都へ遷す。
807（大同２年）	【伝承】この観音を祀り京都清水寺が開く。円珍が開基となる。
1582（天正10年）	箕輪城主藤原頼親、法借寺（小坂）に安堵状を出す。清水観音分１貫200文供免が記される。また小笠原貞慶も同様の安堵状を出す。
1662（寛文２年）	小坂法借寺を宝積寺と改める。この頃は宝積寺のことを清水寺とも言っていた。
1682（天和２年）	【伝承】田村麻呂の御恩徳を偲び、再び千手観音を勧請することになり、松本の仏師へ作仏を依頼。この仏師は京都清水観音を細色したことがあり、この形をそのままに作仏したという。
1709（宝永６年）	中興の祖禅心、堂守となる。
1711（正徳元年）	復興のため、十万檀那万人講勧化帳できる。
1716（正徳６年）	禅心、南無地蔵菩薩の碑、聖観音像碑を造立。
1719（享保４年）	禅心、毘沙門天の石造を造立。
1726（享保11年）	禅心、観音堂（本堂）建立。
1727（享保12年）	５月、権現原にて鐘を鋳る。 ７月、この鐘を寺へ上げ撞き初め行われる。
1730（享保15年）	石造三重塔建立。
1732（享保17年）	不動明王の石造建立。施主和田村蓮生。
1733（享保18年）	六地蔵及び名号碑建立。
1735（享保20年）	清水鐘楼の石碑、鋳造した権現原飯の山に建立。 禅心入寂。また無住となる。
1754（宝暦４年）	再興の祖光賢、清水寺住職となる。 以後近郷の感化に努め、数年にして荒れた諸堂を復興。寺の資産づくりにも努める。
1772（明和９年）	７月18日～28日まで御開帳。大いに賑わう。
1778（安永７年）	光賢、再び無住となり荒廃する事を案じ、江戸芝増上寺の末寺になるべく奔走。実現せず。
1794（寛政６年）	光賢没。
1803（享和３年）	山門及び鐘楼修復。12両２朱。
1805（文化２年）	實道象無参僧尼没。
1809（文化６年）	長裕九世龍紋□大和尚没。
1829（文政12年）	長養寺越山宗大和尚越前国大野産人没。
1849（嘉永２年）	本堂・山門・仁王門等修復。金５両１分、白米５俵１斗。
1861（文久元年）	當山五世大雄實悟和尚没。
1866（慶応２年）	手水鉢を作る。
1875（明治８年）	庫裏が再築される。
1887（明治20年）	前立本尊、飛騨高山へ出開帳。
1920（大正９年）	本堂屋根修理。204円20銭。
1923（大正12年）	庫裏大屋根修理。197円50銭。
1939（昭和14年）	本堂移築工事落成。本堂南に記念碑立つ。
1953（昭和28年）	戦争で供出された梵鐘が、香取秀真父子により再鋳される。
1961（昭和36年）	境内で初めて教育キャンプが行われる。
1963（昭和38年）	風力発電装置設置。費用174,000円。
1966（昭和41年）	清水寺保存会が組織される。
1967（昭和42年）	本堂その他、山形村指定文化財となる。
1968（昭和43年）	境内に唐沢俊樹胸像建立される。
1974（昭和49年）	初めて電気が通る。電話取り付けられる。
1980（昭和55年）	庫裏その他、改修工事行われる。費用に境内の赤松228本の売却代金300万円が充てられる。
1994（平成６年）	本堂・山門他修復、仁王門再建、管理棟新築。
2003（平成15年）	位牌堂再建。
2008（平成20年）	庫裏解体。

調査区全景（東から）



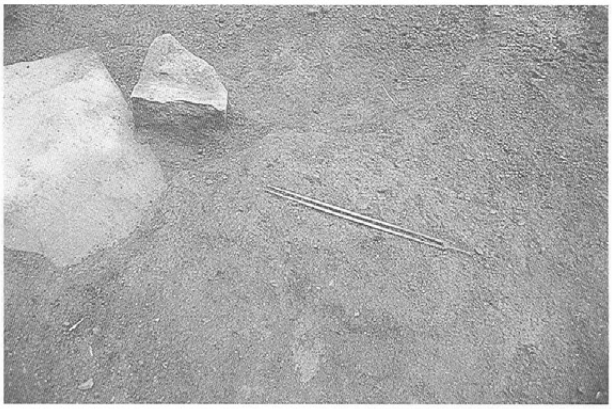
調査区全景（西から）

写真図版２

解体された庫裏

庫裏の大黒柱に刻まれた文字

調査着手前全景（西から）

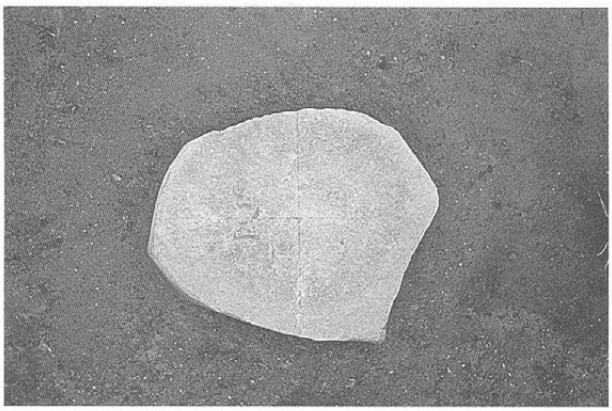


かんざし出土状況

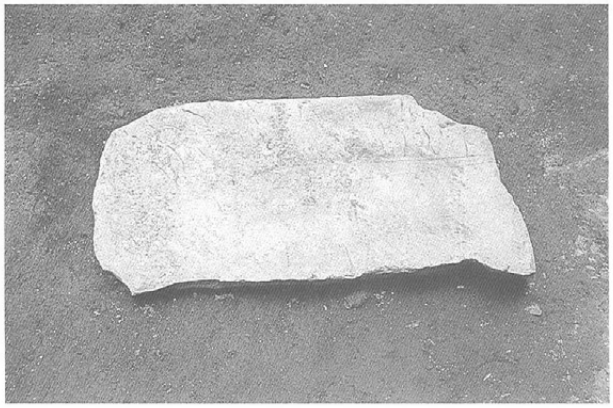
銭貨出土状況

将棋駒出土状況

礎石６

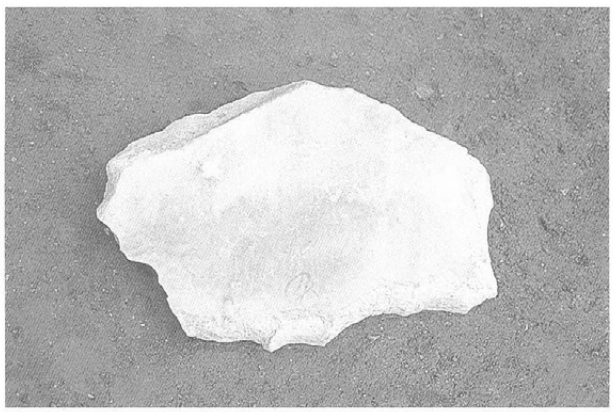


礎石12

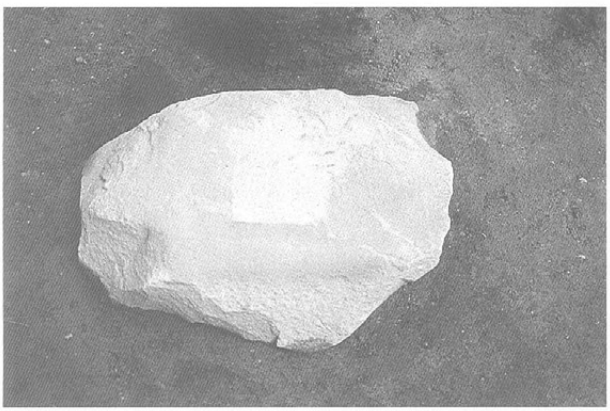


礎石13

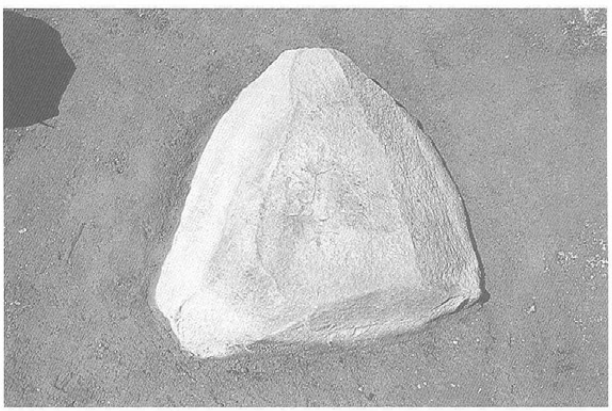
礎石14



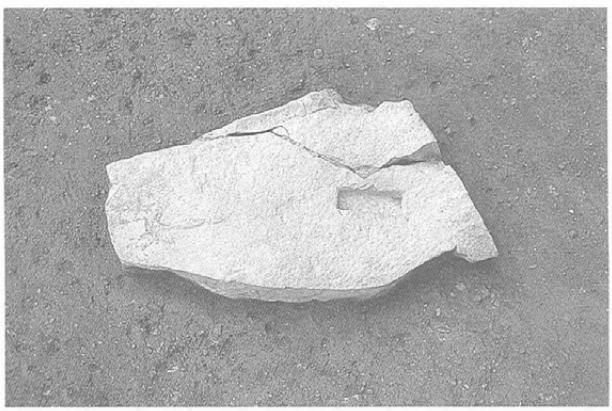
礎石15



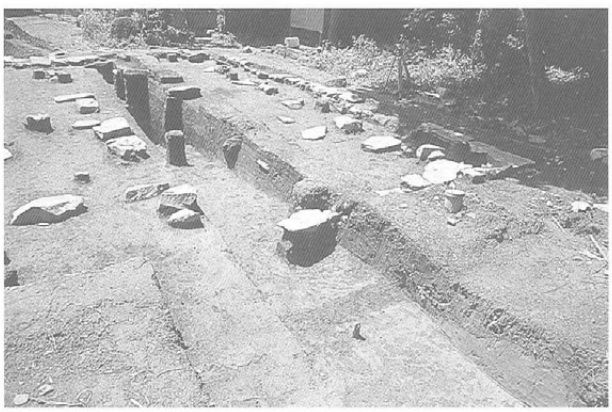
礎石21



礎石23



礎石26



深掘トレンチ（北東から）

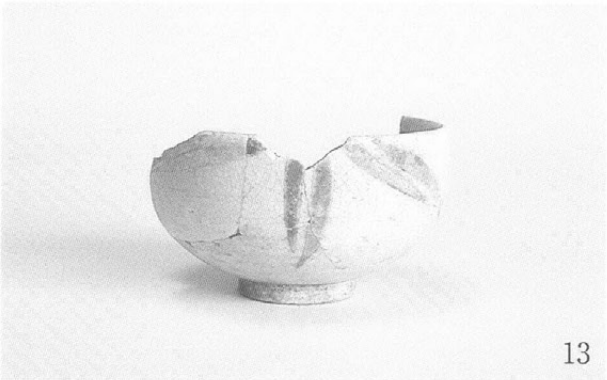
竪穴式住居址内ピット遺物出土状況

写真図版４

6

8

11


13

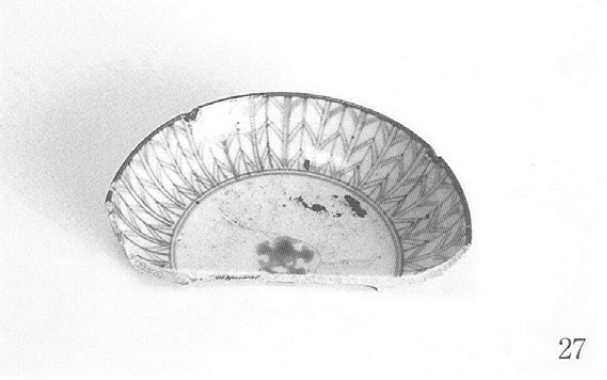
16

17

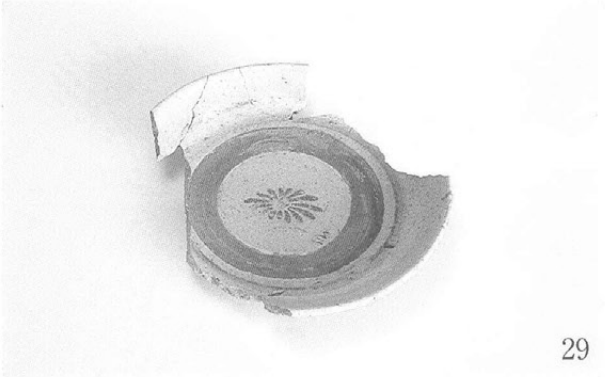
18

21

25

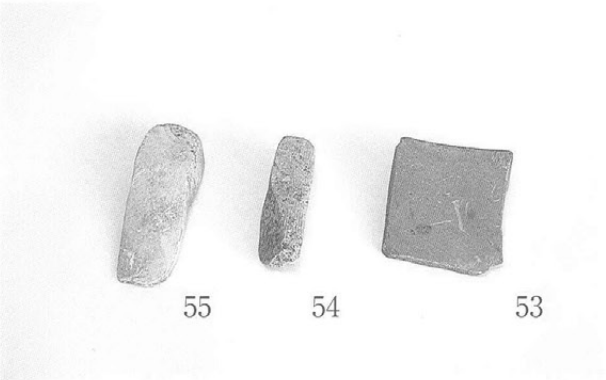

27

28


29

34

39


55 54 53

52

3

6

7

9

報 告 書 抄 録

ふりがな	きよみずでらいせき２
書名	清水寺遺跡Ⅱ
副書名	文化交流施設（仮称）建設工事に伴う記録保存
巻次	
シリーズ名	山形村遺跡発掘調査報告書
シリーズ番号	第16集
編著者名	和田　和哉
編集機関	山形村教育委員会
所在地	〒390-1301　長野県東筑摩郡山形村2040-1　TEL　0263-98-3155　FAX　0263-98-4256
発行年月日	2009年３月31日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
清水寺	長野県東筑摩郡山形村7764	204501	33	36°08′44″	137°50′37″	2008. 7. 14 ～ 2008. 8. 12	200.6㎡	文化交流施設（仮称）建設工事に伴う緊急発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
清水寺	寺院	平安 江戸	竪穴式住居址　1 礎石建物址　1	平安時代の土師器 江戸時代の陶磁器	標高1250mの高所での平安時代竪穴式住居址の検出。江戸時代礎石建物址の検出。

清 水 寺 遺 跡 Ⅱ

―文化交流施設（仮称）建設工事に伴う記録保存―

平成21年３月31日　　発　行

編集・発行　　山形村教育委員会
印　　刷　　カシヨ株式会社